

紀要

縄文時代～古墳時代前期の集団規模の推移

－琵琶湖周辺地域における先史社会の展開過程に関する覚書（1）－

……………瀬口 眞司（1）

近江地域における古代東北系土器の新例

－守山市・横江遺跡・大門遺跡出土事例を中心にして－ ……………辻川 哲朗（13）

古代道路名称考

－阿須波道の名称由来について ……………内田 保之（24）

塩津港遺跡出土の船形模型と琵琶湖の伝統的木造船

……………横田 洋三（35）

比良山系の山寺（3）

－高島市太山寺遺跡について－ ……………小林 裕季（40）

滋賀県とその周辺における石臼の産地に関する一考察

－彦根市妙楽寺遺跡出土の石臼を中心として－ ……………加藤 達夫（44）

28

比良山系の山寺（3） —高島市太山寺遺跡について—

小 林 裕 季

1. はじめに

高島市安曇川町田中宇泰山寺に所在する太山寺遺跡は、『近江輿地志略』や『高島郡誌』に記載のある「高島七箇寺」のひとつとして知られる「太山寺」の跡地に推定されている。山内には連続する平坦面や建物の基壇跡といった遺構が良好に残存している。

太山寺遺跡そのものについては滋賀県教育委員会が実施した『滋賀県中世城郭分布調査』（滋賀県教育委員会1991）に伴い踏査され、寺院遺構が色濃く残る一方で、遺跡内に堀切や竪堀などの城郭遺構が認められることから、寺院を城郭化した山城として評価、周知されている。

本稿においても前稿（小林2012・2013）と同様に比良山系の山寺を検討していくための基礎的な資料として境内概略図を提示し、情報の共有化を目指したい。

2. 太山寺遺跡の概要（図1）⁽¹⁾

太山寺遺跡は、比良山系最北端部にあたる泰山寺野丘陵に所在する。泰山寺野丘陵には西方浄土の信仰の対象とされる阿弥陀山（標高453.6m）があり、その南中腹から南方へ延びる尾根上の、通称「御屋敷」に遺跡の中心施設となる遺構群が立地し、八田川が流れる谷筋を挟んで対面する尾根上にも遺構が広がる。広い視点で見ると太山寺遺跡は丘陵上の谷間の支尾根にあり、平野部への眺望は得られない奥まった位置に立地している。

太山寺の沿革等については断片的な資料ばかりで不明な点が多いが、伝承によれば太山寺は聖徳太子による創建と伝えられる。近隣の中野区には室町時代の作とされる聖徳太子像や聖徳太子絵伝といった太子信仰に関わる宗教美術品が伝わり、太山寺において太子信仰が盛行した時期があった可能性がある。中世では高島七箇寺のひとつに挙げられ、比叡山延暦寺の末寺として発展したとされる。元弘3年（1333）の「近江三重生郷地頭代行豪田地寄進状」『朽木家古文書』には、元弘元年（1331）に太山寺が火災に遭い、太山寺奥院に以前念仏田として寄進した田地の寄進状が焼失し、そのため高島郡三重生郷地頭代の行豪が再度寄進状を奉ったことが記載される。建武2年（1335）の「沙弥道観等田地寄進状」『朽木家古文書』には、沙弥道観と衛門尉頼俊が同じく奥院に田地を寄進したことが記載されている。また『葛川明王院史料』には、中世において太山寺は葛川明王院の頭役に入るなど、葛川修験の一道場として機能していたとされる。

文明16年（1484）には「太山寺覚城坊賢秀田地売券」『朽

木家古文書』といった寺坊の売券がみられ衰退傾向にあったと推測され、慶長7年（1602）の田中郷の検地帳には荒島地の地字名として実松坊、法泉坊、奥院、大仙房、梅本坊などが記載される。慶安4年（1651）の「田中郷拾郷庄屋氏神祭礼二付願書」『田中神社文書』には経済的な理由のために奥院以下坊中の住僧が離散したことを伝え、16世紀末頃には無住化したことが推測されている。また、遺跡内の平坦面からは、平安時代末から鎌倉時代を上限、室町時代中期を下限とする土器片が採集されている。

太山寺と城郭の関係については文献資料には一切みられないが、遺跡内の一部に後述する城郭遺構が認められる。太山寺遺跡の位置が横山郷と田中郷の境界に立地し、加えて太山寺が朽木荘に属していたことから、これらの地域に割拠していた「高島七頭」の横山氏・田中氏・朽木氏の各氏のいずれかによる築城と考えられているが、あくまで立地のみが根拠であり、築城主体や城郭遺構構築の経緯などについては推測の域を出ない。

3. 太山寺の遺構（図2、写真1～8）

太山寺の遺構は阿弥陀山から南方にのびる尾根上に立地する寺院中心域（西尾根の遺構）と、八田川を挟んで東側に対面する緩やかな尾根上から谷筋にかけて広がる遺構群（東尾根の遺構）の2つに大別できる。遺構が確認される範囲は東西約450m×南北約200mに及ぶ。

【西尾根の遺構】

寺院中心域となる西尾根の遺構は、標高約280～320mにかけて舌状の尾根の傾斜に沿って削平によって連続する平坦面を築き、大きく10か所程度の明瞭な平坦面が確認できる。最高所にある標高約310mの平坦面は東西65m×南北50mを測り、本堂などが並ぶ寺院中心施設であったとみられ、方形の建物基壇が3か所残る。最奥にある基壇が本堂跡と考えられ、16m×12mの規模を測る。法面は石積みされ、内部には礎石が多く残存しており、抜き取られている部分もあるが、南東に庇がつく建物が築かれていたことが推測される（写真1・2）。本堂跡の前には約8m四方の方形基壇が残り、礎石などが部分的に残存する（写真3）。周辺には礎石あるいは石積み基壇の石材が散在しており、本堂同様に礎石建物が築かれていたとみられる。またこの平坦面の南西には土塁を築き（写真4）、北側の削り残した尾根裾沿いには方形の土坑と基壇状の高まりがみられる。

本堂跡の東には参道とみられる東西方向の通路が通り、

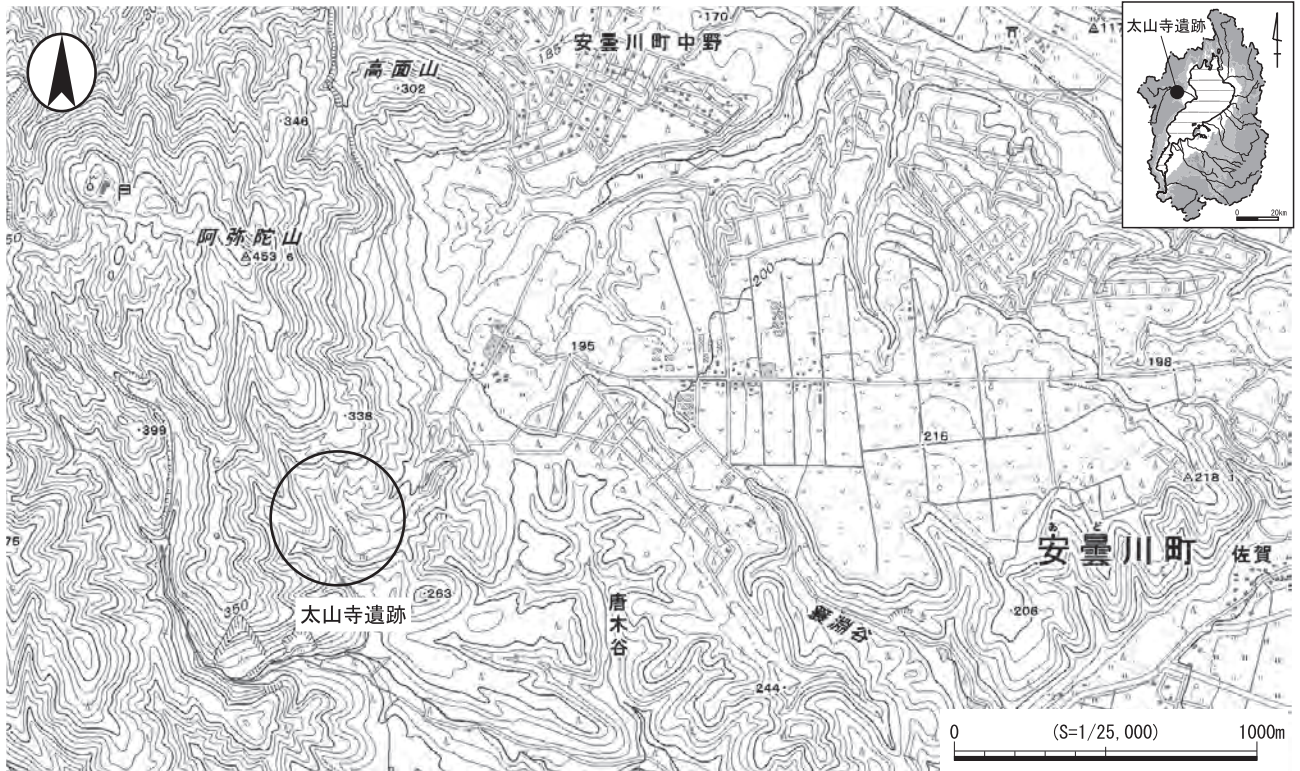


図1 太山寺遺跡位置図 (S=1/25,000)

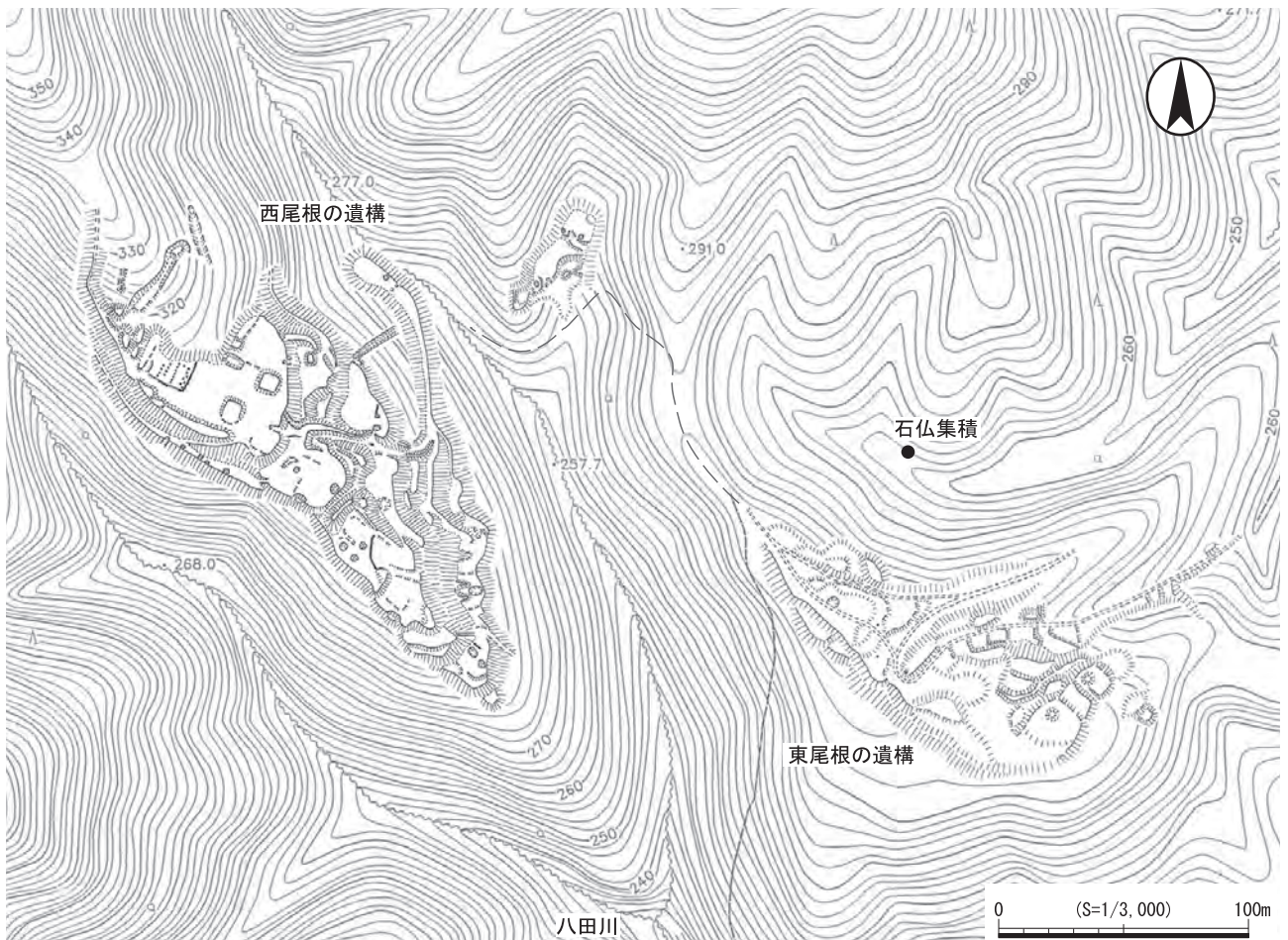


図2 太山寺遺跡境内概略図 (S=1/3,000)



写真 1 本堂跡基壇



写真 2 本堂跡礎石



写真 3 建物基壇



写真 4 本堂跡南側の土塁



写真 5 西尾根の平坦面



写真 6 西尾根中央付近の堀切



写真 7 西尾根平坦面の石垣



写真 8 東尾根の平坦面

その南北に東あるいは南東へ向けて並列的に明瞭な平坦面が連続する(写真5)。本堂跡平坦面の南東の平坦面へは鉤の手状に通路を屈曲させ、城郭遺構の虎口状の様相を呈する。この平坦面とさらに南東の平坦面との間には、幅約6mの明瞭な堀切を築いて分断する(写真6)。堀切南東の平坦面には約1mの落差により区画され、その法面には石垣が施される(写真7)。また井戸跡とみられる3基の土坑が残る。尾根上の平坦面群の下方周縁には幅の狭い平坦面が巡り、通路を兼ねていたと考えられる。

また寺院遺構と考え難い遺構として、本堂跡背後の尾根上には堀切が、本堂跡東側の平坦面より急斜面の等高線に直交して堅堀が認められる。西尾根の遺構は寺院らしい様相を色濃く残すが、本堂跡背後および平坦面群中央付近の堀切や東斜面の堅堀、参道とみられる東西通路の鉤の手虎口状の屈曲など、城郭遺構も部分的に築かれる。

【東尾根の遺構】

西尾根の遺構と東尾根の遺構の間の谷筋には小規模な平坦面と土坑が確認される。これらの遺構は近現代の炭窯などに関わる遺構と思われるが、支尾根上にも平坦面がみられることから太山寺に関わる遺構を再利用した可能性も否定しきれない。

この谷筋の遺構から斜面沿いに続く山道を登ると東尾根の遺構に至る。東尾根の遺構は、標高約270～290m付近の広く緩やかな尾根上を中心に、山道の通る谷筋の斜面上にまで展開するが、いずれも西尾根の遺構とは大きく異なり、削平が甘く区画の曖昧な平坦面が多く残る。緩やかな地形であるため、平坦面を確保するための削平はあまり行われず、地形をほぼそのまま利用したと推測される。谷や尾根からの山道が合流する地点にあたり、その周囲に不明瞭な平坦面がみられ、所々に石仏が単体あるいは集積されて安置されている。

傾斜が強くなる斜面部には規模は大きくないが地形の削平が認められ、特に東側の支尾根から谷筋にかけては平坦面が多く残る。太山寺遺跡への登山道となる東からの山道沿いには、4m×6～8m程度の方形の平坦面が6段ほど連なり(写真8)、またその南側の支尾根上には6m×10m程度の規模で平坦面が連続する。しかし平坦面の面積は本格的な建物を築いたとは考え難い規模であり、築かれたとしても簡易な堂が築かれる程度であったことが推測される。東尾根の遺構は、西尾根にある太山寺本体への参詣道上の簡易施設群であったと考えられる。

4. おわりに

本稿では太山寺遺跡について踏査・再資料化を行い、現地表面にみられる遺構を概観してきた。その結果、西尾根に残る遺構群は太山寺の中心施設群として理解が可能で、特に本堂跡と考えられる最高所にある平坦面には石積基壇

の礎石建物跡をはじめとする複数の基壇が残り、地表面観察から本堂エリアを明確に把握できる。明確な本堂エリアを有する事例は、比良山系および湖西地域の山寺では高島市の長法寺遺跡や大津市のダング坊遺跡など数少ない。遺構の構築状況も明確で大規模なものが多く、阿弥陀山への信仰拠点あるいは葛川修験の一道場として、往時にはかなりの勢力を誇ったことが遺構の状況からも指摘できる。

しかし、比良山系や湖西地域の山寺では寺院の中心地が谷の斜面部に展開していくことが多いのに対し、太山寺では尾根上に展開していくことから、遺構の立地の上では違いがみられる。また寺院遺構を利用して城郭化する事例が多くみられる湖西地域にあって、太山寺で確認される城郭遺構は横山・田中・朽木氏のいずれかが築城に関わったと指摘されているが、寺院的な様相が色濃く残り、城郭遺構が部分的にわずかに築かれることや、衰退しつつも戦国末期まで太山寺が存続することから、遺跡となる最終段階まで寺院の力が及んでいたとみられ、築城は武家勢力によるものとは断言できないと考える。

これまで比良山系や湖西地域の山寺について資料化を進めてきたが、既往の調査・研究の成果を踏まえると、遺跡のプランといった地表面観察による資料が出揃いつつある段階にある。古くから著名な霊山であった比良山系や湖西地域の山寺に信仰ネットワークなどの連携が存在したのか、特徴的にみられる山寺の城郭化は何に起因して誰が推し進めていったのか、など、今後は遺跡の資料化を継続するとともに、これまで論じてこなかった多くの課題について踏み込んで考えていきたい。

註

- (1)沿革等については安曇川町1984・財団法人元興寺文化財研究所1980などを参考に解釈し、再構成した。

文献 (著者名・刊行機関名50音順、刊行年順)

- 安曇川町 (1984)『安曇川町史』
 宇野健一〔註訂〕(1976)『新註 近江輿地志略 全』弘文堂書店
 元興寺文化財研究所 (1980)『比良山系における山岳宗教の研究』
 小林裕季 (2012)「比良山系の山寺―大津市歓喜寺遺跡について―」『紀要』第25号 財団法人滋賀県文化財保護協会
 小林裕季 (2013)「比良山系の山寺 (2) ―高島市長法寺遺跡について―」『紀要』第26号 公益財団法人滋賀県文化財保護協会
 滋賀県教育委員会 (1991)『滋賀県中世城郭分布調査8 (高島郡の城)』
 滋賀県高島郡教育会 (1927)『増補 高島郡誌 全』(1972再刊)
 滋賀県立安土城考古博物館 (2010)『湖西の風土と遺宝―高島郡を中心に―』

挿図・写真典拠

- 図1 国土地理院1/25,000地形図「饗庭野」・「北小松」に拠り作成
 図2 小林が踏査・作図
 写真1～8 小林が撮影

ANNUAL BULLETIN
of
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage
Vol.28 2015.3

私たちは文化財をととして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages